

昭和五年二月一〇日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社 発行人 滝野 忠

東京都千代田区飯田橋4の4の8朝日ビル401号室 電話(03)261-7079  
振替 東京0-58431 労金 東京労金本店No50234

購読料 月額300円 6カ月前納制

〈もくじ〉

■巻頭言■

大衆闘争の高揚をはかれ ..... 2

◇座談会 同時選挙を考える(上)◇ ..... 3

自民”庄勝”の背後にあるもの ..... 3

統一労組懇は新ナショナルセンターとなるか? ..... 8

資料 統一労組懇が総評の批判に見解  
介入論は的はずれ ..... 9

全斗煥の蛮行を告発 ..... 12

— 光州事件の目撃者の証言(一) — ..... 12

革命は新しい第二段階に入った ..... 15

— アフガニスタン革命二周年式典での  
カルマル首相の演説 — ..... 15

◇出版案内◇

岩井・灰原編著『七〇年代労働運動の総括  
と八〇年代労働運動への提言……』

# 旬刊 社会通信

NO.95

一九八〇年七月二日

一九八〇年七月二日

(毎月一日・二日・二日三回発行)

## ■巻頭言■

## 大衆闘争の高揚をはかれ

衆参同時選挙は自民の「圧勝」に終わった。資本主義体制の一般的危機は深化し、資本主義的蓄積の一般的法則のあらわれである「窮乏化」法則が、ますます露骨に貫徹しているにもかかわらずである。労働者の実質賃金は二月、三月にひきつづき四月も前年比で二・六％のマイナスとなったことが総理府の家計調査報告で明らかにされた。

「サラリーマン世帯の四月の実収入は、春闘による賃金引き上げがあったにもかかわらず、消費者物価の上昇に食われて、一年前に比べ二・六％も減少した。これに伴い実質消費支出も減少したが、それでも足りずに引き出した貯蓄額は一世帯平均約七千五百円。物価高の家計直撃がいよいよ深刻になってきた」(読売、六・二七)。

にもかかわらず、「国民」の七〇％を占める労働者、二十数％を占める勤労者の多くが自民党に投票した。これは「国民」の九割が「中産」化したからであろうか。そうではなく、社会党、総評を中心とする労働者階級の総司令部に、労働者・勤労者大衆が魅力を感じていないことのアラわれとみるべきであろう。

今次選挙では「連合」論議がはなやかであった。しかし、その論議は労働者・勤労者の生活とかけ離れたところでおこなわれた。一九七三年、社会、共産、公明、民社の各党は統一戦線政府綱領を発表した。そのとき、五〇％ちかくもの国民が、社会党の統一戦線政府綱領「国民統一の基本綱領」に関心を寄せた。その背後には、反マル生、インフレ阻止国民共闘会議に社会、共産、公明の各野党、総評、中連、新産別の労働団体、そして多くの民主団体、消費者団体の結集にみられる、大衆運動があった。春闘で労働者は三〇％ちかい賃上げをたたかいた。経済闘争の大衆的高揚があった、その力が「政治の変革」を求めさせたのである。

七五年のスト権スト以降、労働者のたたかいから大衆闘争が姿を消した。独占は七六年の田中逮捕以後、「職場に安定帯があつて、官僚、裁判所、警察が健全ならば少々の政治危機は乗り切れる」と、労働組合の丸抱え「労資協調化、国家権力の強化に全力を注いだ。七〇年代後半の独占の労働者への方策はこの言葉どおりにおこなわれた。

まず、彼らは職場闘争、大衆闘争の圧殺に全力を注いだ。労働者、勤労者のそうしたたたかいは、社会主義者の指導と相まって一人一人の労働者の意識を高め、資本主義の矛盾を身体で感じさせるからである。

五月一六日の「大平内閣不信認案」に全野党が賛成せざるをえなかったこと、そして自民党が「分裂状態」におちいったことは、資本主義の一般的危機の深化の院内への反映であった。だが、そこには大衆闘争がなかった。大衆、つまり労働者、勤労者がいないところでの「連合」論議は空中分解せざるをえない。だから、本当の連合、つまり統一戦線形成、発展のためには、大衆闘争の高揚、大衆闘争を前進が不可欠であることを、今度の選挙は示した。同時に、独占、自民党といった金権・汚職・腐敗以外にとるべき方策もない勢力が「金権打破」をスローガンとしたことは、ファシズムの危険をも示した。ヒトラーも同様のスローガンを掲げ、勢力を拡大したからである。それだけに、いよいよ社会党左派の人々が大衆闘争の高揚をはかると同時に、正しい統一戦線論を積極的に提起することが求められている。

◆座談会 同時選挙を考える(上)◆

自民「圧勝」の背後にあるもの

同時選挙は自民の圧勝に終わった。「連合」があれほど声高に叫ばれたにもかかわらずである。七〇年代の彼我の方策を対置するときのみ、その「秘密」が明らかとなる。社会党、労組、社青同、社会主義運動家の四氏にお集まりいただき、今次選挙をふりかえってもらった。読者諸氏の総括の参考にさせていただければ幸いである。  
(編集部)

司会 衆参同時選挙の結果は表一のとおりです。独占資本の政治勢力が圧勝した。独占資本家連中は「日本にとって神様の救いのようなもの」(毎日、六・二四、大槻文平日経連会長)と、手放しの喜びようです。大平内閣不信認案可決↓同時選挙のとき、「とにかくえらいことになった」「当惑するだけ」をくり返すだけだった独占は、稲山嘉寛(日本商工会議所会頭)を先頭に「八〇年代には連合やむなし」「ただこれは次善の策」との方

戦後における総選挙結果 (政党別議席数と得票率)

	進歩	自由	協同	社 会		共 産	諸 派	無所属	合 計	
22回	94	140	14	92		5	38	81	464	
21.4.10	(18.7)	(24.4)	(3.2)	(17.8)		(3.8)	(11.7)	(20.4)	(100.0)	
23回	民主	131	国協	143		4	25	13	456	
22.4.25	121 (25.0)	(28.9)	29 (7.0)	(26.2)		(3.7)	(5.4)	(5.8)	(100.0)	
24回	69	民自	14	48		35	17	12	466	
24.1.23	(15.7)	264 (49.9)	(3.4)	(13.5)		(9.7)	(5.2)	(6.6)	(100.0)	
25回	改進	自由	左社	右社	労農	7	35	17	466	
27.10.1	85 (18.2)	240 (47.9)	54 (9.6)	57 (11.6)	4 (0.5)	0 (2.6)	7 (2.7)	19 (6.7)	(100.0)	
26回	76	鳩自	吉自	72	66	5	1	11	466	
28.4.19	(17.9)	35 (8.8)	199 (39.0)	(13.1)	(13.5)	(1.0)	(1.9)	(4.4)	(100.0)	
27回	民主	自由	社会	89	67	4	2	6	467	
30.2.27	185 (36.6)	112 (26.6)	166 (32.9)	(15.3)	(13.9)	(1.0)	(2.0)	(3.3)	(100.0)	
28回	自民	287	社会	1	1	12	467			
33.5.22	(97.8)		(32.9)	(2.6)	(0.7)	(6.0)	(100.0)			
29回	296	社会	民社	3	1	5	467			
35.11.20	(57.56)	145 (27.56)	17 (8.77)	(2.93)	(0.35)	(2.83)	(100.0)			
30回	283	144	23	5	0	12	467			
38.11.21	(54.67)	(29.03)	(7.37)	(4.01)	(0.15)	(4.77)	(100.0)			
31回	277	140	30	5	0	9	486			
42.1.29	(48.80)	(27.89)	(7.40)	(4.76)	(5.38)	(0.22)	(5.55)	(100.0)		
32回	288	90	31	14	47	16	486			
44.12.27	(47.63)	(21.44)	(7.74)	(6.81)	(10.91)	(0.17)	(5.30)	(100.0)		
33回	271	118	19	38	2	14	467			
47.12.10	(46.85)	(21.90)	(6.98)	(10.49)	(8.46)	(0.27)	(5.05)	(100.0)		
34回	249	新自ク	123	17	55	21	511			
51.12.5	(41.78)	17 (4.18)	(20.69)	(10.36)	(10.91)	(0.08)	(5.70)	(100.0)		
35回	248	4	社会	35	39	57	0	19	511	
54.10.7	(44.59)	(3.02)	107 (19.71)	2 (0.68)	(6.78)	(10.42)	(9.78)	(0.13)	(4.88)	(100.0)
36回	284	12	107	3	33	33	0	11	511	
55.6.22	(47.88)	(2.99)	(19.31)	(0.68)	(6.60)	(9.83)	(9.03)	(0.18)	(3.48)	(100.0)

(注) 回数の下は投票年月日。カッコ内は得票率(%)。党派別議席数は開票終了時点。三三三六回の共産党には革新共同を含んでいない。また各党推薦者は無所属に。日本労働党は諸派に含めた。

国協は国民協同党、鳩自は鳩山自由党、吉自は吉田自由党、新自クは新自由クラブ、

― 社民連は社会民主連合。

自治省選挙局の衆議院議員総選挙結果調べと毎日新聞より作成。

第三五回総選挙での無所属一九のうち保守系一四、革新系三（共産推薦二、公明推薦一）、その他二（中道四党統一）。

策を打ち出し（五月二〇日）、“金権・腐敗の克服こそ自民再生の道”と、自民党三役を呼びつけ（五月二四日）二四年ぶりに注文をつけた。つまり、自民一党支配に全力を上げたわけだ。私は、“金権・腐敗の自民党”をもっとも鋭く批判していたのが、独占であったことに強い印象をうけた。こうした独占の態度は歴史において、ファシズム登場の時と似ているからです。七〇年代後半、労働運動をおさえつけることに成功し、そのことに自信をもった独占の力を過小評価してはならないように思う。まず、これが第一です。

第二に、マスコミは“自民圧勝”の原因に、第一は同時選挙で野党の準備が十分でなく、選挙共闘もうまく機能しなかったこと、第二は大平の急逝で“反大平・反金権汚職”の目標が消え、自民への同情、自民の危機意識が醸成されたこと、第三は野党の“連合”論に不協和音、野党同士のけんかだけが残り、“国民”の野党への不信感が増幅したことを、一致して上げている。現象的にはそういう面をもつが、事態の本質をとらえてはいない。そこで、なぜ“連合”論が挫折したのか、“連合”とは何かが新ためて問われなければならないように思う。これが第二点です。

そして、第三点目として、先の“連合”論議とも関連するが、各野党のたたかい方はどうだったのか、自民を“手助け”しはしなかったらどうかということで、各党の評価。

第四点として、われわれは社会党・総評を心から愛しているわけだから、社会党・総評のこれからの進路といったことについて論じ合っていたらいいと思う。

まずA氏から今次選挙をどうみるかを総括的に話していただき、その提起にそって進めたい。

### 自民低落傾向は変わらず

**A** 選挙結果全体の感想から申し上げたい。自民党は三六議席をやし、公明、共産が大幅に議席を減らした。各党の議席率は自民五五・六％（前回四八・七％）、社会二〇・九％（同）、共産五・七％（八・〇％）、公明六・五％（二・四％）、民社六・五％（六・八％）、新自ク二・三％（〇・八％）であり、自民が六・九％、新自クが一・五％上昇している。他方、自民の得票率は四七・八八％（前回四四・五九％）、新自ク二・九九％（三・〇二％）で自民は三・二九％伸ばしているが、新自クは逆に〇・三％減らしている。ですから、得票率からいえば議席数、議席率ほどダイナミックな変化はみられません。

この傾向が社会、共産、公明、民社の各党についてもいえることは第一表のとおりです。公明、共産については得票率と議席率の大きな乖離がみられますけれども。

まず、「自民大勝」をどうみるかだが、第一表に明らかのように、自民は五五年六三・二％、五八年五七・八％、六〇年五七・五六％、六三年五四・六七％と六〇年代前半までは単独で優に五〇％を超える得票率をえていた。だから、前回、そして今回と漸増傾向を示しているからといって、“自民一党体制”が再確立したわけではない。どの新聞も「自

民はできすぎ」と報じていたが、いぜんとして退潮化傾向が続いているとみるべきだ。歴史はジグザグがありながら、法則性を貫徹していくわけですから。

全体的な傾向でもう一つの特徴——これがひじょうに重要だと思うが——は、自民は六七に得票率を四八・八〇%（議席数二七七）として、はじめて五〇%を割り込んでから九年四七・六三%（二八八）、七二年四六・八五%（二七一）、七六年四一・七八%（二四九）と、得票率、議席数ともに着実に減らしていた。ところが、前回の総選挙で議席数は減ったものの得票率では四四・五九%と二・八一%ふやし、今回も三・二九%、合計六・一%もふやしている。さらに、自民補完勢力の新自々、保守系無所属を加えれば独占の利益を直接代弁する政党、党派の得票率は五二%（前回四七%弱）を超えている。したがって、この数字だけをみれば五〇年代まではいかにいまでも六〇年代前半の頃に「復調」したかのように見える。

ですから、七〇年代前半の労働運動の高揚、七五年暮のスト権スト以降の七〇年代後半にかけて「ある種の変化」が起こっていることが指摘できる。この変化がどうしてもたらされたのか、その検討を避けて通れないように思う。

細かいことはあとで論じていただくことにして、社会党にふれますと、この間継続して得票率を減らしているのはこの党だけです。その傾向はとくに都市部においていちじるしいのが特徴です。ですから、社会党に活力を生む方策、政策をうちだすためにも、「反面教師」として、七〇年代後半、独占が自民強化に結びつくどのような方策をもつてあつたかがぜひとも検証されねばならないように思います。

もう一つ、「読売」が選挙の結果を称して「新五五体制」と書いていた。「五五体制崩壊」を云々したのは民社、公明です。彼らは保守分裂↓社会分裂、つまり科学的社会主義否定の、「二つの国民党」論を主張した。つまり、反動化、右傾化したマスコミの援助をうけながら、「五五体制崩壊」を宣伝することによって、階級対立はなくなつたとみせかけてきたわけだ。ところが、今度の選挙はいわゆる「中道」が大幅に後退することによって、「五五体制」といういい方は別として、保守と革新の対立が新たな形態で浮上してきたことを示している。したがって、「五五体制崩壊」云々の仮面がはがれたことがやはり大きな特徴として指摘できる。しかも、民社と公明の亀裂は大きくなっているわけですから。全体的な傾向は以上のように思う。

### 目立つた自民の思想攻撃

次に選挙戦全体にふれてみたい。大平の急逝、世界情勢の急激な変動、国内経済の先行き不安などにもよるものだろうが、独占とその政治勢力の自民党がもつと積極的に論争をしたように思う。エネルギー問題を中心とする経済、反ソ・反社会主義、キャンペーンと結びついたアフガン問題、それに非武装・中立への批判↓国防意識の醸成が主なものです。つまり、「あなたは連合という得体が知れぬ、不安定な体制を選ぶのですか。それとも三十数年の実績をもつ自民党政治、自由主義体制を選ぶのですか。もし「連合」政府になつてアメリカと断交するようなことになれば、日本に石油は入ってきません。経済はメチャクチャになりますよ。そのときあなたの生活は守れると思いますか」とか、「社会党は非武装・中立をいつているが、自分の戸に鍵をかけない人がどこにいるか。自分の国を自分で守るのは当然」と、「連合」か「自由主義体制」かと、保守票の掘り起こしに躍起と

なったさまはとくに顕著な傾向だった。つまり、金権・腐敗、物価・インフレ、軍備増強への不安といった資本主義の矛盾を「反ソ・反社会主義」でまとめ、体制側にとりこむという大きな網がうたれていた。それと同時に、きめこまかい運動です。それが自民「勝利」の背景だ。

他方、野党各党はどうだったか。「連合」「連合」とのかけ声だけではぎやかだった。生活の問題、将来への不安といった労働者、勤労者のもっとも身近な問題が、「連合」論議によってかき消されてしまった。「何のために連合するのか」がぜんぜんはつきりしない。くり返しになるが、労働者にとって賃金、労働条件、物価、税金、教育、老後、医療がもっとも切実な問題だ。ところが「連合」政府になれば労働者のくらしがどうなるのかについては、極端な表現かもしれないがどの党も何もいわない。したがって、社会党を中心とする野党が論争を避けたといわざをえないわけだ。共産党は「すべての党が政策論争を避けた」とあたかも同党だけが政策論争をしたかのようにいつているが、この点では共産党も同罪だ。同党は「共産党が排除された」「清潔な政治」としかいつていないし、政策論争をまじめに発展させる基盤を失わせた。さらに、共産党は「アフガン問題がひびいた」といつているが、これほど馬鹿げたスリカエはない。共産主義、つまり科学的社会主義を否定して歩いたのは共産党自身です。ですから、自分で票を減らしたようなもの（笑）です。このように、今の政治経済体制をどうするかについて、野党の方が消極的であった。さしさわりのあることはできるだけふれまいとする姿勢が顕著だったといえる。

### 社会党左派勢力にチャンス

第三は連合政権（府）についてです。選挙が先に述べたような結果に終わったため、「公民連合政府」の夢も、「保革連合」への願望も打ち砕かれた。その意味で「連合」論議がしばらく吹き飛ばぬ配がみえることは、社会党左派の順番がいよいよ近づいてきているように思う。というのは、ここで主体性強化に全力を上げてということと同時に、右派の求めた「連合」が挫折したわけだから、本格的な連合論、つまり統一戦線政府の主張、統一戦線政府と社会主義政権の関係を今の情勢のなかでしっかりおさえていく、その問題提起をしていくことが重要だ。

社会党の機関紙「青年の声」が、社会党の「国民連合政府綱領」の学習に多くのページをさいていた。これは青年の意識が高まっていることを示すものだ。

そうした青年は選挙でひじょうに大きな役割を果たしている。青年共闘ですね。彼らは国際情勢の問題（アフガン、イラン等々）、連合政権論に強い関心をもって、学習・交流を広範に組織した。選挙をやっていると、当然、自民党、民社、公明の主張と真正面からぶつかる。だから、彼らはそうした問題がだされたとき、勉強の成果を生かし、くわしく説明し、共感を得て帰る成果をあげている。青年共闘の学習・交流↓選挙↓学習・交流↓選挙の生き生きした姿は、今までのような街頭宣伝と、推せんして上から指示して「ガンバレ」「ヤレ」というかけ声だけの運動では勝てなくなってきたことがよりはつきりしたように思う。それは階級闘争が激化していることのアラわれだろうが、一人一人がしっかりとした自覚をもつことを強制されているといえる。その意味で、これは結論にもなるのだろうか、社会主義の宣伝、教育が本当に求められているように思う。だいたい、こういうことを今、考えています。

司会 新聞はことさら「連合論議による『不協和音』」を強調しているが。

**A** 社会党にせよ共産党にせよ個々の政党には独自の主張があるからこそ、社会党、共産党等々と名前のちがった党がある。これはあたりまえのことです。その独自の主張についての支持、人氣がひろまってくれば国民の支持も当然大きくなる。だから、それがなかったということだと思ふ。独自の党の主張が個性豊かで支持があればたとえ全部一致しなくても野党への信頼が落ちることはない。どれにも国民が魅力を感じていないのに、しかも内部でケンカばかりしているから「不協和音」だけが大きくなる。たとえば社会党の主張についていえば、社会党の主張がはっきりと明確であれば、共産、公明と主張がちがうからといって票が減ることにはならない。

### 目立つ保守化傾向

**B** 私はこう考えている。一つはつきりとしていることは公明についてです。この党の得票数は六九年以来、多少のデコボコはある。だが今日にいたるまでほとんど変化はない。投票率の変動によって、得票率に一〇・九一％（六九年）、八・四六％（七二年）、一〇・九一％（七六年）、九・七八％（七九年）、そして今回九・八三％と若干の変化はある。だから、この一〇年の推移をみれば、宗教政党としての公明の限界がかなりはつきりと示されていることがわかる。公明党幹部が「たとえ、社会と民社のあいだでマタさきにされても、「社公民」成立に全力を上げる」といわざるをえなかったのは、公明自身がみずかららの限界を知っている証左だ。

**D** そのとおり、今回の選挙で公明はマタさきにされてしまった（笑）。

**B** 第二は、先ほどA氏も語っていたが、自民はその得票数からみれば漸増傾向を示していることだ。保守系無所属、新自民をプラスすれば六三年選挙時の勢いがある。資本主義の一般的危機はたしかに深化しており、自民・保守の議席数は減っているが、得票数、得票率がかならずしも漸減しているとはいえない傾向があらわれている。したがって、七〇年代の労働運動、階級情勢、全体的な右傾化、そのなかでの独占の組織づくりといったものが検討されなければならないのではないか。その点、私も同感です。

第三は社共の得票比だ。六〇年代以降を年代的に記せば、六〇年三〇・四九％、六三年三三・〇四％、六七年三二・六五％、六九年二八・二五％、七二年三二・三九％、七六年三一・〇七％、七九年三〇・一三％、八〇年二九・〇四％と三三％を最高に二八％の間にある。他方、六七年以降の「中道」の得票率は六七年一二・七％、六九年一三・一二％、七二年一五・四四％、七六年一七・一九％、七九年一七・二四％、そして今回は一六・三一％と、微増にとどまっているのが特徴だ。したがって、体制的危機の深まりと階級闘争のあらわれ方は、「中道」が伸びているということでもなく、七〇年代、独占・保守の本格的まき返しがおこなわれていることを、この面からも示している。

**C** それは衆院選だけの傾向ですね。

**B** そうです。私、あちこち回ってつくづく感じることは、意識が相当右翼化していることです。民社の栗栖問題がそうだし、労働運動に典型的にあらわれている。

**司会** 大平が急逝した。攻撃の目標が消えたと、野党が一樣に逡巡したのもそのあらわれだ。公明、民社といった「中道」政党がとまどうのはわかる。しかし、反独占の党、社会党にも同様の傾向があらわれたことは、それを示すものだろう。

他にも問題はいろいろあると思うが、まずこの点から議論を深めたい。

(つづく)

## 統一労組懇は新ナショナルセンターとなるか？

統一労組懇はどこへゆく

最近しばしば「統一労組懇」問題について、「共産党系潮流は総評からでいいこうとしているのかどうか」「でていくとすればそのポイントは何かを示してほしい」というおたよりをいただく。この問題に答えることは難かしい。第一に共産党の労働運動の組織論は科学的社会主義にもとづく一貫性を欠いているからであり、第二に共産党系潮流のなかにも大きな意見の対立がみとれるからである。たとえば自交総連、全動労が「今すぐ新ナショナルセンターをつくれ」（第一回あり方懇）といっているのに、総評傘下の六単産、国労のなかで「革同」と呼ばれる共産党系の人々が概して慎重な態度をみせていることである。

だからといって、彼らの主張に一定の傾向が読みとれないわけではない。

### ICFTU加盟が最大のポイント

統一労組懇の活動が目立って活発になったのは、周知のように「社公中軸」がマスコミをにぎわせ、労戦統一問題で総評が同盟にスリ寄る姿勢が明らかとなった以降である。とりわけ、マスコミが榎枝氏が総評と公明党の定期協議で「政権構想協議は社公関係を最優先すべき。公明が共産の参加に反対すれば、社会党も共産を切らざるをえない」と発言したと報道したこと、第二にICFTU大会に出席した富塚氏が現地で「総評としては労働戦線統一が進み、新たなナショナルセンターを展望するなかでICFTU加盟問題を前向きに検討していきたい」と語ったと伝えられたときからであった。

統一労組懇が「総評単産委員長、書記長、地本代表者合同会議に提出された幹事会案についての見解」をだしたのが一月一日、「真に労働者の利益を守るナショナルセンターのあり方で全国的討論を」とよびかけたのが一月七日、大阪、京都でそれらの動きを積極化する決定、決議が相次いだのが一月一四日以降であり、二三日に「ナショナルセンターのあり方懇談会」準備会を発足させていることに、それは示されている。

つまり、ICFTU加盟問題、共産排除が共産党にある種の決断を固めさせたこととができる。したがって、岩井章氏は『国際労働運動』六月号の「新ナショナルセンターはどうなるのか」という論文で、統一労組懇、共産党系の今後の動向を分析し、総評がICFTU加盟を決めてはいけない。このとき「日本の労働運動に決定的な混乱が起」ころと、次のように分析しているが、この分析がいま見通しうるポイントをおさえたものといえよう。以下、関連部分を引用し、結語とする。

「新しいナショナルセンターを作るといふ問題は、それ程重要な問題であることは宮本氏も日共幹部も当然理解していることだろうから、前記のように宮本氏が語っても（『毎



日』三月三日付のインタビュアー）本当のところはまだ肚をきめたとは思わない。ゴアのサインを出したとは思わない。しかも私の知るかぎりの統一労組懇参加組合の間にも、様々の異見がある。総評の右傾化を阻止し、統一労組懇が、新しいナショナルセンターを作るかどうかということになれば、様々の意見がでてくるのも当然であろう。ある組合は、総評が自由労連加盟に踏みきらないかぎり、別のナショナルセンターは作りたくないと言っているし、またいずれのナショナルセンターにも加盟していないある小さな組合は、すぐ別のナショナルセンターを作るべきだと主張している。

たしかに総評が、同盟やJCの圧力によって自由労連加盟に踏みきれば（実質的でも形式的でも）世界労連加盟組合の多い統一労組懇は、総評からでていかざるを得なくなるだろう。しかも、それは統一労組懇組合だけでなく、世界労連に加盟している全自交といった社会党系組合もまた同じことである。

つまり、総評はどんな事情になっても、自由労連加盟をきめてはいけないのである。それをやれば直ちに総評の空中分解となるのである。しかも自由労連加盟といった大問題は、それぞれの単産がまずきめねばならない。私の所属する国労の場合も、加盟決定することはまずまずかしいだろう。教組、自治労なども同様だろう。だから私は総評の自由労連加盟はまずないとみる（九一〇頁）。

五月二六日の総評拡大評議員会で、全日自労の中西委員長が「現在のように戦線統一が民間先行で進み、国際自由労連加盟に踏み切った場合、われわれのような世界労連加盟の組合はどうしたらいいか」（『労働ニュース』六・二）と述べていることにも明らかである。

これが、統一労組懇の動向をみる大きなポイントであろう。

### 党と労組の有機的結合が要

衆参同時選挙のなかで、マスコミは労組員の労組への無関心が自立していると書いている。賃金、労働条件、権利といった労働者にとってもっとも緊要の課題を素通りしての「大論戦」は、「組合離れ」を促進するだけである。今もっとも問われていることは、吹き荒れる合理化の嵐のなかで、働く仲間の実態を直視し、実態のなかから労働組合の意義、総評が、あるいは各単産が社会党を支持するゆえんを広範に論議し、仲間を組織する任務である。このことを忘れるとき、独占を喜ばせるだけに終わることがしつかりと自覚されねばなるまい。

（編集部）

### 資料 統一労組懇が総評の批判に見解 介入論は的はずれ

統一労組懇の活動にたいして「分派・分裂主義」だとか「分派活動」という攻撃について政策推進労組会議やIMF・JC（金属労協）そしてその中心となっている鉄鋼労連などこそが、総評や春闘共闘の行動とは「別行動」を一貫して行っており、賃上げ自衛の

立場から春闘をたたかう労働者に「水をかけている」のである。

こうしたもとで、国民春闘を真に発展させる立場から、今日の国民生活の苦しみの元凶である独占資本の横暴と対決し「四・三中央総行動」のような自主的・自覚的な行動展開によって、春闘をたたかう労働者を励ましているのが統一労働組懇であり、批判されるいわれはない。むしろ、こうした統一労働組懇への批判は、批判者自身の右翼的変質の告白にほかならず、それは労働戦線の右翼的再編成や分裂主義への加担に対する大衆的な批判をかわすものでしかない。

「政党の介入」で動いているという攻撃について「わが国の既存のナショナルセンターは、総評の社会党支持、同盟の民社党支持というように、本来、思想、信条、政党支持の別なく、要求に基づいて結集する労働者階級の大衆組織としての労働組合の基本的性格に反した方針をとっているが、このことは労働戦線の統一をすすめるうえでも、革新統一戦線を実現し推進していくうえでも大きな障害となっている。

統一労働組懇発足の背景や、運動発展の歴史には、日本の既存のナショナルセンターが、資本からも政党からも真に独立していないもとでの、労働者の民主的エネルギーの正しい結集体として生まれるべく生まれたという歴史的必然性がある。統一労働組懇こそが労働組合の「政党からの独立」を強調し、既存のナショナルセンターによる「特定政党支持義務づけ」の誤りを一貫して指摘している潮流だ。

これに対し、労働組合の機関決定で社会党や民社党支持を決定し、それを組合員に押しつけ、組合員から選挙資金カンパを徴収したり、さらにはそれらの政党の党員拡大への協力までを方針でうたい、政党と労働組合の関係を混同し、労働組合を政党に従属させ、労働者の利益よりも政党の利益を優先させているのは、統一労働組懇への批判者である総評自身であり同盟である。それをこともあろう、一貫してその誤りを指摘し、労働戦線の真の統一を追求している統一労働組懇にたいして「政党からの介入」で動いているなどというのは、主客転倒どころかまさに妄言だといわなければならない。

ここで、政党と労働組合の関係について一言ふれるなら政党、とりわけ労働者階級に基盤をおいている政党が労働組合運動に意見を述べたり、評価を与えたりすることは政党本来の責務に属することであり、また政党がだした問題提起について労働組合が、自らの判断で自主的に取捨選択し、自らの利益や方針に合致するものを取り入れていくということも労働組合の自由であるはずだ。問題はそのことが、政党への従属とか特定の政党の利益のためにということではなく、労働者の利益を真に守る立場から、名実ともに「政党から独立」し、労働組合の主体性の確立を前提として行われているかどうかということが重要である。

したがって、共産党が統一労働組懇を評価していることをとりあげて鬼の首でもとったように「統一労働組懇は共産党の介入で動いている」などという批判は、政党と労働組合の正しい関係を理解していないというよりは、理解しえない者のまったく的はずれな批判といわなければならない。

労働戦線統一にあたって「特定の思想的立場に固執し大衆に押しつけている」という攻撃について「特定の思想、路線を押しつけているのは、同盟や右翼的潮流であり、それに追隨している総評自身にほかならない。同盟や右翼的潮流は、労働戦線再編成の前提条件として、反共主義の別名である「労働組合主義」や「国際自由労連加盟」という特定のイデオロギー・国際路線の支持などをあげ、それを労働者に押しつけており、総評もまたその同盟路線への同調を明らかにし、大会決定の名によってそれを加盟組合や労働者に押しつけてきているからである。

統一労働組懇に対して、総評がいわれなき攻撃をかけてきていることは、総評自身がすでに同盟と同じ立場にたっているというこの証明以外のなにものでもない。

「第五のナショナルセンター」をめざしているという攻撃について「労働組合がどのようなナショナルセンターに加入するかは、本来それぞれの労働組合が自主的に選択すべきことがらであり、それは労働組合の固有の基本的権利である。

既存のナショナルセンターは労働戦線の右翼的再編・統一をすすめるようとしており、そのことからするならば、右翼的反共ナショナルセンターの実現を許すか、それとも統一労働組懇が主張している三つの原則をかね備えた真のナショナルセンターを確立するかという、二つの道の選択の問題であって、「第五のナショナルセンター確立」という問題ではない。結局のところ、統一労働組懇批判は、批判者自身の反労働者性や右翼的路線を示すものではない。

## 「八〇年代」への基本視点を示す！

近刊！

### 階級的労働運動への道

七〇年代労働運動の

総括と八〇年代労働運動への提言

B6・活版・価格千二百円

社会通信社は本年一〇月で四年目を迎えます。また九月一日には『旬刊社会通信』一〇〇号を迎えることになりました。読者の皆様の激励と指導のたまものと深く感謝しております。当社では一〇〇号を記念して、八〇年春闘、七〇年代労働運動を問い直し、階級的労働運動の再構築への論争の書『七〇年代労働運動の総括と八〇年代労働運動への提言』（岩井章・灰原茂雄編著）を六月中旬を目標に準備していることです。B6判、活版、二百六十頁くらの予定です。内容は次のとおりです。

#### 序章

向坂逸郎

第一章 戦後労働運動の総括と八〇年代労働運動への提言

岩井章

第二章 現代労働運動と労働組合の組織論

灰原茂雄

第三章 一九七〇年代後半の春闘とその教訓

第四章 日経連の労働運動対策／第五章 現代労働運動と反合理化闘争（「政策」と階級闘争）／第六章 「経営参加」論はなぜまちがいか／第七章 労働戦線統一への基本

視点／第八章 統一労働組懇はなぜ克服されねばならないか（日本共産党の労働運動論批判）／第九章 社会主義政党と政策／補論 エネルギ問題への基本視点

# 全斗煥の蛮行を告発

——光州事件の目撃者の証言(一)——

1980年7月11日発行

光州蜂起は世界を揺るがした。全斗煥のさしむけた空いてい部隊による光州大虐殺を目撃し、自らも死の危機にさらされた人間の生々しいレポートが六月五日、発表された。これは、日本カトリック正義と平和協議会が東京・四谷での記者会見で発表した『引き裂かれた旗』と題する文書で、信頼すべき筋をとおして入手したものだという。

レポートは、空いてい部隊の残虐行為が想像を絶するものであったことを証言しているとともに、軍隊が「外国からの侵略」に対処といながら、国内の社会変革弾圧のための暴力装置に他ならないことを、このうえもなく明瞭に示している。

わが国では現在「自衛隊増強」「防衛意識の国民的合意」「武器生産、武器輸出」と、軍備増強論、憲法改悪論を独占とその政治勢力(自民党)、そして民社がわめき立てている。軍隊の本質を明らかにする意味においても、『引き裂かれた旗』の要旨を『朝鮮時報』(六月五日)から資料として転載する。

(編集部)

△五月一九、二〇日▽ 天はすべてこだまする喊声で破られていた。デモをする学生と見物していた市民は、避けるいとまもなく蜂の群のように飛来した空いてい特攻隊の包囲網にかかり、死力をつくして逃げていた。

まさか良民を殺しはすまいという単純で愚かな信頼だけをたずさえ中心街に近づいていた私は、いったんは生きなければというもっとも基本的な本能の命ずるまま必死に逃げた。あとを追ってくる銃剣のギョッとする触感を肩に意識しながら、あるビルディングのなかに夢中で飛びこんだ。ありがたいことに先に来ていた一人がすぐにシャッターを降ろしてくれたので鉄槌で頭がい骨を割られ、帯剣によって胸が突き裂かれる惨劇を免れることができた。

## 手当たり次第に虐殺

鼓膜を破る銃声、鋭利な帯剣、鉄棒を振りまわす音、だれかの生命が絶える悲鳴は地獄の修羅場を雄弁に物語っていた。老若男女、学生、一般人の区別なく手当たりしだいに殴り、刺し、打ちのめした。

この時、私のアングルは恐ろしい現場をとらえた。避難もできずにいた七十歳位のおじいさんの後頭部に空いてい兵の鉄槌が打ち降ろされるや、口と頭からは噴水のような鮮血がほとぼり出て、老人は悲鳴をあげるひまもなくバタッと倒れた。

二人の空いてい兵に犬みたいに引きずられてきた女の人は臨月に近い妊産婦であった。

「このアマ、袋に入っているのは何だ」私は何を問うているのか分らず、彼女の手を見つめたが、手には何もなく、何かを入れるような袋も見えなかった。

「このアマ、わからんのか？男か、女か？」横にいた奴がせき立てているのを見て私ははじめて何をいっているのが分かった。女の人のいっている声は聴き取れなかったが、

何なのか分らないという素ぶりであった。「それじゃわからせてやろう」彼女が抵抗する間もなく着物をつかむや引き裂いた。ワンピースが引き裂かれ肌が露わになった。空いてい兵は帯剣で彼女の腹をぐさりと刺した。えぐって刺したのかすぐに腸がとび出した。奴らはふたたびその彼女の下腹を刺して胎児を引き出して、まだ息をしている彼女に胎児を投げつけた。

とうてい信じられず、あり得ようのないこの凄惨な現場を目撃していた人々は皆同じように首をふり、身震いしながら歯ぎしりした。

私は目を閉じ唇をかみしめた。全身にけいれんが起こり、ふたたび目をあけたときには死体も空いてい兵もその場から消えうせていた。横に立っていたおじさんの話によれば、まるで汚物をすてるようにかますのなかに押し込め、清掃車に投げ込んでいった、という。

いつの間にも他の場所に避難したのか、私の横にいた人たちは消え去っていた。戒厳軍が押し寄せ、通り過ぎた後には血の跡と、破片と、汚物と、憤怒が乱舞する。帯剣と鉄棒を避け、群衆は路地裏、喫茶店、食堂、店、建物のどこへでも飛び込んだ。血を吸うのに血眼になって、奴らは誰ともなく捕えては刺し、殴り、その場で即死させたのである。

私はできるかぎり路地裏を選んで走った。幸いにも手に何も持っていないで助かった。ある路地を抜け、大通りの前で私はびくっと立ちどまった。ほとんど反射的に身を空箱の後に隠した。まことに恐ろしく悲惨きわまりない、歴史が生じて以来どんな虐殺現場においてもけっしておこなわれたことのない、そのような惨劇をまたも見なければならなかった。はたして奴らが同じ血を分けたわが民族だろうか。同じ言語を使用し、同じ国籍をもったわが国の人間だというのか。女子大生らしい三人の娘さんが空いてい兵によって徐々に裸にされていた。ブラジャーとパンティまで全部引き裂き、そのなかでもっとも悪どい顔をした空いてい兵が軍靴で娘の尻を蹴とばしながら「早く消え失せろ！ このアマが、今がどんな時だと思ってデモなんかやらかして騒ぐのか」と、怒り狂う狼みたいにいっただ。しかしどうしたことか娘たちは逃げるのではなく、胸をだいて道ばたに座り込んでしまった。この時一人が叫んだ。「こいつら命が惜しくないようだ。それなら仕方ない」その瞬間、娘たちの背中には帯剣が同じように刺され、噴水のように血がほとばしった。倒れた娘たちの胸に帯剣で×印を書き、生死の確認もしないで清掃車に投げ込んでしまった。闇から闇に葬るのか、火葬にするのか、それは知る由もない。

### 全市民が反撃

この時であった。逃げまわっていた市民たちの喊声さらには荒々しくなり、興奮は絶頂に達し始めた。だれかの口から「市民たちよ、皆立ち上がろう。私たちの息子が皆死んでしまいます。工具でも鶴はしでも手当りしだいに持ってきてたかおう」。ワーという喊声とともに市民が集まり始め、またたく間にある木材所の角材をそっくり持ってきたのか、今までヤジ馬で逃げ廻っていた民衆が逆にたたかう姿勢に急変していき事態は悪化していった。

弟と従兄弟の生死を確認したのは夜十一時過ぎであった。

△二一日▽すでに都心のアスファルトは鮮血で染まり、戒厳軍の残虐な無差別発砲に夜を徹した示威群衆は五百人以上が血を吐いて倒れたと、高校三年生の甥が夜をあかして奴らに火炎ビンを投げつけて抵抗したすえみるも無惨な格好で帰ってきて教えてくれた。私が犬死にをしてはならないという「友だちが死に兄弟たちが皆死んでいくのに自分だ

け生き残るため隠れているのですか」興奮を押えることができず私にくっついてかかるので何もいえなくなりました。

血を見た学生たちと市民の心は憤怒と怨みで興奮の極に達したのであり、市内の運転手という運転手がそれぞれ車に乗ってきて、デモの群衆を乗せてカーペレドをくり広げ始める。街路にはどこに行っても切れ目なく市民が出てデモの群衆に拍手と歓呼で激励を送り、若人は我先に車に乗った。高速バス、市内バス、軍用トラック、装甲車、ブルドーザー、霊柩車、将軍専用防弾車、絵でも見られない様々な車両数万台が動員されたのであり、アジア自動車工場の整備員数百名が飛び出て故障した車両を整備しふたたび動かした。列をつくるデモの車両にガソリンを供給するのを惜しまなかった。車両ごとに血で書かれたプラカードと、乾いていない鮮血が流れおちる車体のスローガンが市民の心を揺り動かした。「殺人鬼、全斗煥をたたき殺せ」「崔圭夏と申鉉鎬を追放せよ」「金大中氏を釈放せよ」「戒厳令を撤廃せよ」という鮮血で書いたプラカードとともにわれわれの旗は、彼らの手で彼らの車でけんらんとはためいていた。

### 空てい部隊の後退

空てい部隊が撤収したといううわさが聞かれた。現役の大尉が直接伝えるところによると、空てい部隊のなかに全羅南道出身者が一人内務班に加わっていたことがわざわいしたのだという。市民を無差別虐殺する奴らのやり方に憤慨した兵がそばにいた五人を射殺し、自殺したというのだ。混乱をきたした空てい特攻隊は郊外に一旦後退し、一般戒厳軍が要所を掌握したままデモの群衆に向けてひきつづき無差別射撃をおこなってきた。

アスファルトの上になべばりついているあの幼き者の血、道ばたに裸のままに放置された幼い少年たちの遺体を見て、ただ黙って見物していられようか。恐怖と戦慄の都市、破壊と殺人が乱舞する街、火の柱がいたるところで天を覆い、いっさいの放送は中断され、ニュースが遮断された暗黒の孤島。しかし市民たちの胸は熱かった。

民主守護のために身を捧げると起ち上がった若人の憤怒にふきあがる涙、血に染った胸。彼らは頭に血書をしたためた鉢巻をまき、のどが裂けんばかりに叫ぶ。愛は我らの隣人、貧しく素朴で汚れなき子どもたち。はやくも車両には女学生やおばさんたちも合流していた。叫び、叫びつづけ、のどがかれて聞こえない声で民衆に向かって涙の訴えをする幼き子どもたちの絶叫に、私はついに泣いてしまった。車に乗れなかった市民は我先に握り飯をつくり、飲料水を持って来た。食べ物、飲み物を与えるのに惜しいものは何もなかった。ある店の七十歳の老婆は陳列してあった食物を全部そのままかき集めた。卵、パン、コーラ、牛乳、ジュースなど、あるもの全部をあげたいようだった。惜しいものはなかった。その箱を老婆は持ち上げられなかった。私はそれを持ち上げ、走っている車を止め、車のなかに押し入れた。子どもたちの顔にはたたかたかたか死のうという覚悟がみなぎっていた。食べ物を準備できなかった婦人たちはいちように水桶を持ってきて彼らの顔を拭いてやり、水を口にそそいでやっている。一心不乱に疾走する車の間隙で、危険をまかえりみず、皆ともに生命を捧げる血と愛の闘争であった。背中をこすりながら激励する人、薬とドリンク剤を持ってきた薬剤師たち、全身の魂をこめて、拍手と激励を送る人波、人波。

(つづく)

## 革命は新しい第二段階に入った

—— アフガニスタン革命二周年式典での  
カルマル首相の演説 ——

四月二十六日、アフガニスタル民主共和国は、革命二周年の記念式典をおこなった。この記念式典でのカルマル首相の演説（要旨）を紹介したい。

### 目的達成には時間と労力が必要

ちょうど二年前、自由を愛するアフガニスタン国民は、自分たちの歴史に新しい一頁を開いた。政治的前衛であるアフガニスタン人民民主党の指導のもとに、わが国の進歩的、革命的勢力は、搾取者たちの権力を打倒し、後進性から進歩への発展の道を、また古い国土に新しい公正な社会を建設する道を切り開いた。われわれは、今、この道の出発点に立っているにすぎないということ、また、目的を達成するためには時間と労力がかかるということ、を自覚している。しかし、重要なことは、われわれが、この道を断乎として歩み出したこと、そして、新しい、豊かな、幸福なアフガニスタンを建設するという強い確信をもっていることである。

四月革命は、わが国の発展を求める切実な鋭い要請にたいする回答であった。しかし、その勝利のためには、一定の国際的条件を考慮する必要があった。その基本的な条件とは、帝国主義が武力干渉と経済封鎖という手段で、革命を抑圧できないような国際的な力の均衡である。われわれの偉大な隣国であるソ連および他の社会主義諸国、すべての革命的な政党や運動、勢力の援助に感謝しながら、われわれは、四月革命の成果を守り、発展させること、また、そのことですべての平和を愛する国民の共通の事業に貢献することが、自分たちの義務であるとみなしている。

アフガニスタン民主共和国の外交政策の基本は、平和共存、非同盟、国際連帯の原則である。

非同盟運動の原則を支持しているわが党と政府は、アフガニスタンとソ連が、二国間の協力の枠内でのった措置を、アフガニスタンを非同盟運動のなかで孤立させ、他の参加国と対立させるために利用しようとするいかなる試みにも断固として反対している。

アフガニスタンの合法的政府の要請によって、アフガニスタン領内に一時的に導入された限定された兵力のソ連軍は、一つの目的にのみ従っている。つまり、アフガニスタンを侵略から守るために協力するということである。わが国の内政に干渉しようとする敵の試みが中止され、国外からの介入の脅威がなくなりしだい、ソ連軍は、ソ連とアフガニスタン条約に従って撤退するだろう。

### ソ連との友好・協力は全政治のいしづえ

アフガニスタン人民民主党とアフガニスタン民主共和国政府が、その外交活動において

考慮していることは、わが国民の幸福と繁栄が、偉大なソ連との友好関係と協力の今後の強化と発展によって保障されるだろうということだ、この友好と協力は、新生アフガニスタンの全政治のいしづえであり、四月革命によっておこなわれた諸改革とわが愛する国土を防衛するもっとも重要な要因である。

アフガニスタン人民民主党とアフガニスタン民主共和国政府は、中東地域、中央アジア、南アジア、東南アジア、インド洋全域を戦争の火元にしてはならないと考えている。この地域を周辺諸国民や世界の人々にたいする軍事的脅威の発生源にしてはならないのである。そこで人民民主党中央委員会と政府は、この地域の国際情勢を改善し、現存する意見対立を穏やかな、建設的、実務的交渉にもとづいて解決するのに不可欠な相互理解と信頼の雰囲気をつくり出す目的から、新たな積極的提案を作成した。この提案は、「四月革命二周年に寄せてのアフガニスタン人民民主党中央委員会のテーゼ」のなかで公表された。われわれは、これにたいする前向きな反応があるものと期待している。アフガニスタンと近隣諸国との間の問題は、善意と国家的英知にもとづき、平和的方法によって諸国民の利益になるように解決できる問題ばかりである。

#### 四月革命の事業は不敗である

民族民主革命である四月革命は、いくつかの困難に直面した。こうした困難の一部は、階級戦のなかでできたえられた、経験豊かな、労働者階級がないこと、人口の九〇%以上が読み書きもできなかつたこと、十分な職業技術や知識をもち、革命に奉仕する指導者と専門家が少ないこと、革命後にとりわけ不可欠となった集団指導制と民主集中制の伝統が人民民主党になかつたことなどによるものであつた。陰謀と策略で権力にたいアミンの犯罪的行為は、革命に多大の損害をもたらした。

四月革命によって権力を失つた搾取者と裏切り者たちは、革命にとつて重大な困難をつくりだした。彼らは、帝国主義や北京の覇権主義者、一連の国の反動層に支援されて、革命後すぐに破壊テロリスト・グループを組織し、サボタージュと破壊行為を開始し、市民の殺害や脅迫を始めた。四月革命と人民民主党についてのデマが流され、中傷キャンペーンがおこなわれ、文盲でしいたげられた人々、政治に無知な人々に一定の影響をおよぼした。

しかし、四月革命を破壊し、ゆがめ、圧殺しようとした彼らの犯罪的計画は、結局のところ失敗した。人民民主党、革命評議会、軍の愛国主義的な多数派は、革命を救い、守ろうというアフガニスタン国民の決意に依拠して、革命の敵の犯罪計画を粉砕した。一九七九年一月二七日、犯罪的なアミン政権は一掃され、革命は新しい第二段階に入った。

四月革命の正義の事業は不敗である。なぜならば、アフガニスタンの勤労者とすべての愛国勢力が人民民主党の政策の新生活建設計画を支持しているからであり、軍が革命の目標に忠実であり、革命の成果を守る決意を固めているからである。また、全世界の進歩勢力、とりわけ強力なソ連の支援と全面的な援助があるからである。(APN)